

前方後円墳から邪馬台国へーパターン情報学の歩みー

小澤 一雅

(前方後円墳研究会)

1. 研究の発端

電気工学科の学生だった頃（1960年代中頃）、「情報工学」という看板を掲げた講座を開設していた先生（田中幸吉教授）につよく惹かれた。当時、半導体やマイクロ波工学などが最先端の分野であり、そういった主流の分野を担当する講座に学生の人気は集中していた。一方で、やや異端の匂いがただよう情報工学も一部の関心を集めていた。情報工学という言葉の魔力がそうさせたのかもしれない。わたしは、脇目もふらず田中教授の講座の門をたたいた。

最初にとりかかったのは、文字認識技術の研究（教授から指示された研究テーマ）だった。まじめにとり組んで論文を書き、学位も頂戴した。この工学的研究の過程で、当面する研究テーマを超えて、多くの論文や著作を幅広く乱読しつつ、仲間たちと議論を楽しんだ。徐々にわたしはものの形状（パターン）の成り立ちや変化のしくみを数理的に解き明かしてみたいと考えるようになった。わたし流に言えば、パターン情報学のめざめであった。

2. パターン情報学の事始め

1972年大阪電気通信大学工学部に着任した。そこでパターン情報学の実践にとりかかるにあたって、どんなパターンを対象にすべきかについては徹底的にこだわった。紆余曲折の後、前方後円墳というパターンにたどり着くのだが、2年かかっている。

研究をやりはじめてわかったことがある。すでに考古学では前方後円墳のパターンを分析する研究は行われていて、形態研究あるいは型式学的研究とよばれていたのである。こうなると、研究法はちがっていても、わたしの成果は考古学プロパーの世界でも一定の評価が得られるものであってほしい、という思いをつよくした。このためには考古学者との緊密な交流が不可欠だが、幸運にも多数の考古学者との出会いがあり、前方後円墳の形態研究は順調にすべり出した。こうした研究の萌芽期における思い出話はすでに拙著[1]でくわしく述べている。

3. 前方後円墳の形態研究

前方後円墳とは、土でできた墳丘墓であって、3次元のパターンとみることができる。そこで3次元パターンの比較分析という視点から研究に着手することにした。といっても、1970年代初期のコンピュータ環境では、墳丘の3次元形状を数値データ化するのにも多大な労力を要した。多くのゼミ生諸君の協力があつての作業であった。成果は論文や雑誌の記事として発表し、考古学サイドからも一定の評価を得ることができた。

この後、形態研究を基軸としつつも、前方後円墳に関するさまざまな応用研究を並行して展開していくことになった。具体的には、前方後円墳データベースシステムの構築やCG技法を用いた古墳時代の復元映像化などの研究があつた。

一方、わたしの研究の起点になっている前方後円墳とは、そもそも日本古代史においてどういう意味をもつ存在であるのかといった、核心的問題にも関心をいだくようになっていった。

これはある意味で必然だと思っている。つまり情報学とは、数理やコンピュータなどのツールを活用する思考の枠組み、あるいは思考法そのものであって、それじしんコンテンツをもつものではないからである。

極論すれば、いずれの分野で情報学を実践するにせよ、その分野における新たな知見(コンテンツ)を生み出すものでなければ、研究として完結しているとはいえないであろう。

4. 邪馬台国を考える

近年、邪馬台国畿内説がマスコミをにぎわし、奈良県桜井市にある巨大前方後円墳の箸墓古墳を卑弥呼の墓だとする見解が大々的に喧伝されるようになった。わたしは、前方後円墳という特異な墳墓形式の発生観からこうした動向に正直疑問を感じていたので、形態研究から得られた知見を活用しながら、邪馬台国畿内説を正面から検証することの必要性を痛感するようになった。しかし、どういう方針で検証を進めればいいのか、あるいは適正な解をみちびく鍵となるものがあるのかもまったく見当がつかない、まさに視界ゼロの

状態であった。

数年間の逡巡の後、もっとも重要な鍵は、古代における「年代」であると確信し、その線に沿って検証作業を開始した。年代基準として天皇の崩年(崩御年)を選び、崇神天皇など古代天皇の崩年を、以降の信頼度の高い天皇の崩年系列から導かれた規則性にもとづいて修正し、年代軸を再構成した。この結果、崇神天皇の崩年が早くとも4世紀中頃と位置づけられ、それと連動して箸墓古墳の築造年代が従前の定説よりさらに下降することになった(早くとも4世紀前半の中頃)。

この築造年代は、3世紀中頃(248年頃)に没した卑弥呼の墓が箸墓古墳である可能性を完全に排除するものである。

以上は、わたしの検証における結論部の要約であるが、作業過程では、古事記・日本書紀、魏志倭人伝、古代史・考古学分野における先行研究の資料や著作、および前方後円墳の形態研究による知見などを適宜参照している。くわしくは、拙著[2]を参照していただければさいわいである。

(2016.2.27)

【参考文献】

[1]小澤一雅『前方後円墳の数理』雄山閣、東京、1988。

[2]小澤一雅『卑弥呼は前方後円墳に葬られたか—邪馬台国の数理—』雄山閣、東京、2009。